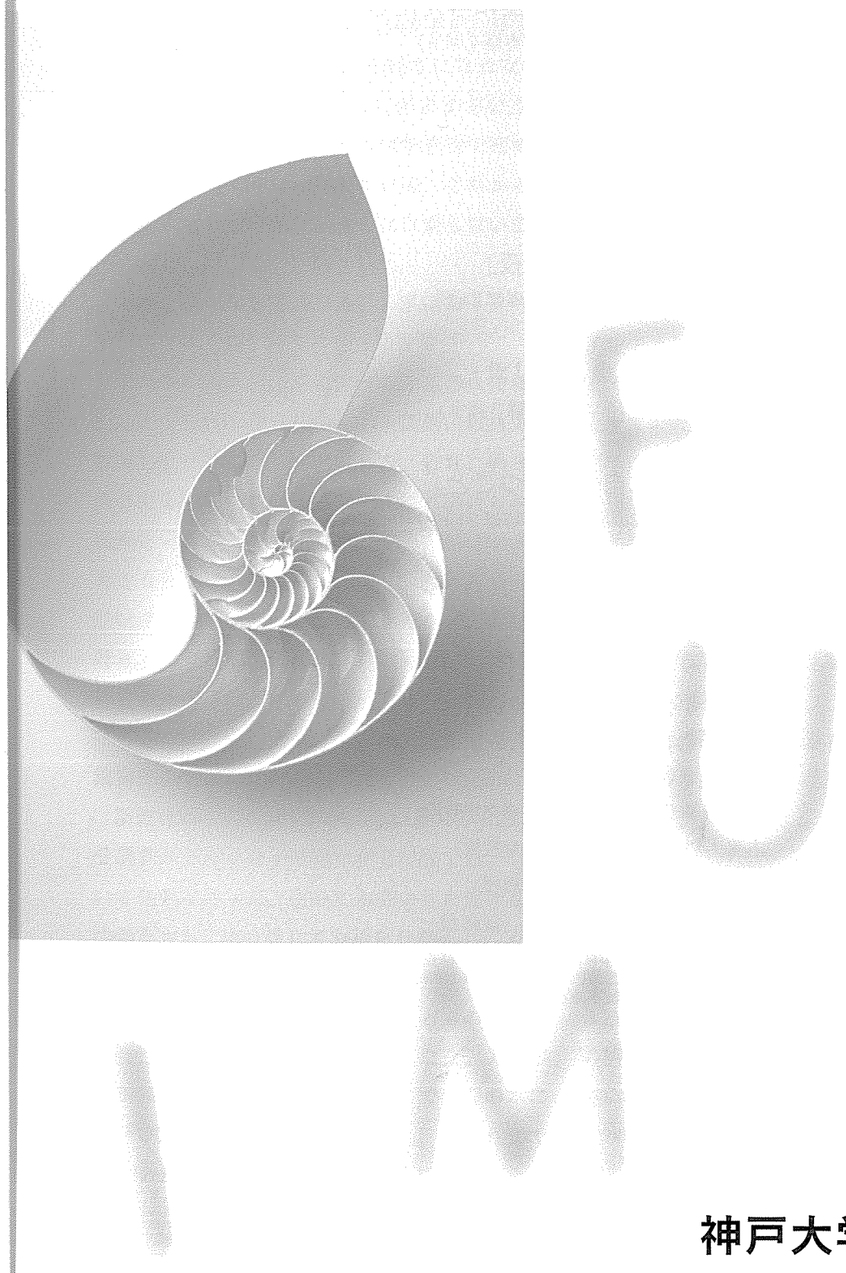
発 行

2017年10月28日
神戸大学文学部同窓会
文窓会
http://www.kobe-u.biz/bunsokai/（文窓会）
http://www.lit.kobe-u.ac.jp/（神戸大学文学部）

第11回

文窓賞優秀作品集



2017年10月発行

文窓会
神戸大学文学部同窓会

第11回　文窓賞
学生レポートコンクール 入賞作品

優秀賞

「神戸大学が１人の文学部生に与えたもの」
赤羽 佳奈子（国文学専修４回生）

佳 作

「モスクワの夜」
山根 彩花（英米文学専修２回生）

「歩く魚と独り言」
神谷 茉音（哲学専修３回生）

「自分に自信を持つこと」
上石田 菜穂（国文学専修２回生）

◎ 選考会　2017年８月９日

◎ 選考委員

西川 京子（審査委員長）
増本 浩子 学部長（ヨーロッパ文学教授）
市澤　哲 副学部長（日本史学教授）
白鳥 義彦 副学部長（社会学教授）
武藤 美也子　　吉田 浩次　　日高 健一
廣野 幸夫　　田中 賢司　　三宅 征彦
河島 真　　坂本 直樹

優秀賞

神戸大学が１人の文学部生に与えたもの

赤羽　佳奈子（国文学専修４回生）

いわゆる「絶叫マシーン」が苦手だ。昇ることも、落ちることも、速度も好きになれない。乗り物に乗せられ、為されるがままという状況に恐怖を覚える。小学校の修学旅行で初めてジェットコースターに乗って以来、これからの人生で二度とこの系統のものには乗らないことを決意した。

しかし、昨年９月のある日、私は３０メートルの高さから飛び降りることになる。

きっかけは、夏休みに司書教諭講習に参加したことだった。２年生の春から国語の教員免許取得のための授業を受け始めた。教育に興味があったというよりは、国文学に触れ続けられる職業という点で魅力を感じ、免許だけは取っておこうという考えだったと思う。教育について勉強する中で、かねてから本が好き、図書館が好きという気持ちも加わり、司書教諭に興味を持った。そこで、本学では授業がないため、昨年の８月、和歌山大学と上越教育大学で司書教諭講習を受講した。

講習は約２０日間。夏休みということもあり、受講者のほとんどが実際に教育現場で働かれている先生方だった。初めてお会いした様々な年代の方々と、本を通じてお話をした。

その中で、１冊の本をきっかけに人生が変わったという先生に出会った。子どもの頃から真面目に慎重に生きてきて大人になり、ある事情から絶望する経験をした。そこで１冊の本に出合い、「インドに行ってしまえ」とこれまでにない決断力で単身インドへ飛び立ったそうだ。そこでの体験から自分に変化が起こり、人生が変わったとのことである。そのお話をお聞きしたときに、インドに行く前のその方が自分に重なった。どこへ行っても真面目すぎると言われ、石橋を叩きすぎて壊す優柔不断さ。私も突拍子もないことを実行する決断力と行動力が欲しい。講習に来なければなかったであろう、この方との偶然の出会いを無駄にしたくない。インドとは言わないが、すぐに実行に移せることで何かないだろうか。どうせならば、普通に生きていたら経験しないようなこと、これまで積極的にやりたいと思わなかったこと…。咄嗟に思いついたのが、バンジージャンプだった。苦手なことは承知の上で、一遍飛んでみよう、と決意したのだ。

そして翌月、早速３０メートルの台の上に立っていた。遠くに曇り空より少しだけ鮮やかな色の海が見える。

「では、心の準備ができたら言ってください。」

「行きます。」

１秒も迷うことなく、私は真っ逆さまに飛び降りた。一瞬の後悔。景色が歪み、重力の存在を知る。映像がスロー再生のように見える。徐々に地面が近づくが、恐怖はまだ終わらない。今度は重力に逆らって跳ね上がる。身体が人形のようにバラバラに弾む。心臓がきゅっとなるあの感覚は、これから先もなかなか味わえないに違いない。

バンジージャンプを境に、私は大きく変わった。と言いたいところであるが、実際は目に見

えて何かが変化したわけではない。地上に戻ってみれば、また普段と変わらない生活があるだけだった。変わったことがあるとすれば、ただ一つ、一瞬で飛ぶことを決意できた自分がほんの少しだけ誇らしい、という程度である。小さなことだが、この体験により、自分がいざというときには決断力を発揮し、行動できると知ることができた。

珍しい体験をした夏が終わり、本格的に進路選択の時期となった。変わらず優柔不断な私は、大学院、教員、民間企業など、自分で増やしてきた分かれ道の前で大いに迷うことになる。どこかで腹をくくらなければならない。しかし、どれにもそれぞれ魅力があり、やりたいこともある。迷い続けた結果、どの選択肢も可能性の残る限りは捨てずに臨むことにした。二兎追わなければ一兎も得られないと知ることができたのは、文学部で多様な視点から課題に向き合う姿勢を学んだからである。最終的に一兎を選べば良い。いざというときにはバンジージャンプで見せた決断力が顔を出すだろう。これまでのように迷って何もできないくらいなら、動いてから考えようと思えるようになっていた。

しかし、選択を迫られる６月、決断力はまだ眠ったままだった。国文学の研究に携わりながら、答えのないことを学び続ける苦しさと楽しさ、点と点が結びついたときの心躍る感覚を得てきた。教育実習や司書教諭講習を経て、学んだことを伝える難しさとやりがいを体感した。就職活動の中で、未知の世界に身を置き、新たな出会いを経験しながら社会に貢献することへの魅力を知った。何かを捨てることにはエネルギーがいる。裏を返せば大学でそれだけ多くのものを得てきたということだが、そう考えられるようになるのはもう少し先だった。そのときはすべてが上手く行かず、悩み過ぎて何もかもどうでもよいと思いつつも、何かせずにはいられないという状況にまでなった。

最終的に、決断力が顔を出したのは７月。焦りに拍車をかける蝉の声に加え、様々な人に話を聞き、相談に乗っていただいたことで、やっと目を覚ました。私が選んだ一兎は、来年度から新聞社で働く道である。新たな世界に立ち、人との関わりの中で自分も学び続けながら、それを言葉にして広く伝えることができると考えて選んだ。

「風が吹けば桶屋が儲かる」という。高校時代、古今和歌集の１首と、言葉で世界を広げられることを教えてくれた恩師との出会いが私を神戸大学文学部に導いた。言葉を吸収しようと行ってきた読書が広い興味に繋がり、国文学を学び続けたいという思いで教職課程を受講したことと結びついて司書教諭講習に至った。そこからの出会いが未知の行動のきっかけとなり、バンジージャンプで得た小さな誇りは、最終的には自分で決断できるという自信から将来の選択肢を絞らない決意に変わった。教育実習や就職活動を併行したことで、学んだことを人に伝える魅力を知ることに加え、新たな世界への興味も得られた。最終的な決め手がどこにあったのかは、自分でもよく分からない。しかし、小さすぎて記憶に残っていないこと、書き切れないことも含め、自分がとってきた行動、関わってきた人のすべてが今の自分を形成している。上手く行かないことも数知れずあった。そこで懐悩して擦り減らした部分も、何かで埋めて修復するのではなく、鑢をかけて磨き、擦り減った部分さえ自分のものにしてきた。簡単には変われないが、小さな積み重ねがあったからこそ、着実に自分を知り、周囲を知り、多くのものを得て来られたのだ。

進路も無事に決め、卒業を控えた今、文学部で最初にぶつかった問いに再び向き合うときが来た。

「文学部は世の中に必要ないのだろうか」

「文学部で学んだことが何の役に立つのか」

時代はめまぐるしく変わる。昨年のアメリカ大統領選で、SNS による情報の力が、もはや国を動かすまでになっていると知った。また、カタール断交はサイバー攻撃によるフェイクニュースがきっかけとも言われている。情報の扱い方ひとつで、国際関係まで変わることに驚き、恐れを抱いた。発信も受信も、以前よりずっと気軽にできるようになり、どれだけ注意を促されても、軽率な発言や受容が後を絶たない。更に、数年後には人工知能が人間の代わりに働くことが当たり前になると言われている。膨大なデータを中心に世の中が回る。これからは今までにも増して、言葉を大切にし、情報に惑わされず考える力が必要になる。私は文学部で、答えのない問いに対し、様々な角度から得た情報を駆使することによって、批判的に向き合いながら考えを深めることを学んだ。１つ１つの言葉に執心し、自分のものにしようとしてきた。方法や目的に差異はあれ、文学部のほとんどの人が言葉を材料に、物事の「考え方」を身につけているだろう。文学部にできること。それは、目に見えない「考え方」を自分だけのものにせず、何らかの形で社会に提供していくことかもしれない。最短距離で役立たないとしても、図書館からバンジージャンプに繋がった私の大学生活のように、文学部での多様な学びのように、見えないところで結びつき、どこかで桶屋を儲けさせる風になるかもしれない。文学部だから役に立たないというわけではない。学んで得てきた引き出しを、自分なりにどう活かすかが問題なのだ。その活かし方が遠回り過ぎてあてにならないと思われようと、１つ１つの出会いや経験が、いつか何かに影響する。少なくとも私はそれを、この４年間を通じ、身をもって証明できたと思っている。

大学入学時に「言葉を選ぶ能力を身につけ、多面的に物事を捉えられるようになること」を目標とした。私にとって、すべての始まりは「言葉」だった。そして、これからも言葉に拘って行く道を選んだ。正直なところ、今でも選択に迷いがないとは言い切れない。慎重さを飛び越えて動き、丁寧かつ迅速に言葉を選ぶことができるのか。自分の言葉が多くの人に影響を与える、責任ある仕事が務まるのか、不安は拭えない。

バンジージャンプ後も、絶叫マシーンは苦手なままである。自分で決めて飛び降りることは受け入れられるが、乗り物に乗ったまま意思とは関係なく落ちることが怖い。だが、今となっては、そのままで良いと思える。普段は優柔不断でも、いざというときに自分で決断して動けたらそれで良い。不安や多少の後悔があっても、自分の意思で決めたことには責任が持てるはずだ。

言葉を得るために本を読み、文学を研究し、あらゆる場所で様々な人と話をしてきた。言葉のおかげで多くの人との交流が生まれた。それは時に１０００年前から、クレタ島から、新幹線の隣の席から私に語りかけ、広い世界を見せてくれた。

小学校時代から愛読書だった『バッテリー』のあとがきに、忘れられない文章がある。

「巧にはボールがあり、わたしには言葉がある」

野球の才能がある巧はボールを武器にすればよい。直接的に社会の役に立つことは、実学を学んだ人に任せる。私には取り立てて秀でた才能はないが、「言葉」を大事にしてきた。もちろん言葉がすべてではないが、私はこれからも言葉で様々な人と関わり、それを自分の言葉で伝えて行きたいと考えている。文学部で学んだことで、将来どれだけ世の中の役に立てるかは分からない。不安も多くある。だが、まだまだ未熟ながら、私もいつかは胸を張って言えるよ

うになりたい。
「私には言葉がある」。いや、「私たちには言葉がある」と。

【参考資料】
『バッテリーII』あさのあつこ，角川文庫，平成16年

佳　作

モスクワの夜

山根　彩花（英米文学専修２回生）

スマートフォンを片手にバスの座席に座り、頭の中でその日の晩御飯について考えていたとき、バスが角を曲がり大きく揺れた次の瞬間わたしはレーニンの死体を見たいと思っていた。天啓のごとく――わたしはレーニンという偉人に興味があるわけでもないし、別段死体が好きというわけでもない――その考えが舞い降り、わたしの指は驚くほど自動的にスマートフォンの上を滑った。ロシア　旅行ツアー。そう検索し出てきたいくつかのサイトを見て、しかしその結果分かったのは、ロシアへの旅行者の多くが、特にレーニンの死体を見ることに重きをおいていないということだった。大手旅行代理店のツアーでは、大体が赤の広場まではいくものの、レーニン廟までは立ち寄らない。わたしは、レーニンの死体が防腐加工を施され今なお保管されていることを教えてくれた、高校時代の世界史の先生のべたついた声をぼんやりと思い出しながら、それ以上レーニンについて考えるのをやめた。ロシア語も知らない、ソ連の歴史の知識もおぼろげな自分には、もはやなすすべなど一つもなかったのである。

思い返すにそのころのわたしは、時の流れにひどく怯えていたのだと思う。自分にとって一九歳は、人生でもっとも酒を必要とする年齢だった。漫然とした大学生活に脳の表層を蕩けさせながらも、まだかろうじて形を保っていたその核の部分は常にわたしにこう問いかけていた――お前は何になろうとしているのか？最初は自分の声だけだったその問いも、やがて父親や、母親や、高校のクラス担任や、その他すべての「大人」たちの無数の声に変わる、そしてそれらの声が幾重もの層になってわたしを覆い、まるで水の中に頭までつけたときのように、体を、息を重苦しくさせるのだ。わたしは何者でもなかった。また何者かになれるだろうという確信もなかった。ただ、文学部を志望します、文学部ですと言い切ったときの、相手の顔の筋肉の見られる独特のこわばりだけが、映像として頭にこびりついて離れなかった。そして二言目にはこう尋ねられる。で、その学部に入って将来何になりたいの、と。それに何も答えられないで曖昧に笑うとき、普段の何者でもない、強いて言うならば文学部生であるばかりの自分は、社会から見て足のない幽霊のようなものだろうと痛感させられるのだ。忘れたかった。だから、アルコールの代わりに音楽を浴びるほど聞いた、映画を見、本もいくらか読んだ。しかしそれらは、一時的に心を癒してくれはするものの、根底にある不安を拭い去ってはくれなかった。わたしはいつか何者かにならなければならない。しかし、何者になればいいのかさえ分からない。けれども時はいたずらに過ぎていく。そのころのわたしは、ただ波打ち際に小舟を浮かべ、一面に広がる大海原を前に、恐怖と不安とわずかばかりの希望で体を打ち震わせていた。遠くで見知らぬ生き物の群れのようにうごめく波は、日によって太陽に照らされキラキラとこちらを誘っているようにも、暗雲が立ち込めごうごうとこちらを飲み込んでしまいそうにも見えるのだ。だからレーニンの「死体」を求めたのである。自分のそれと比べて彼の人生がどのようなものであったのか、わたしは教科書に書いてあるような劇的な事実しか知らない。そんな激動の日々の中に、心安らぐ瞬間もあったかもしれないし、不安で眠れない夜も

あったかもしれない。しかし今、蝋人形のように硬直して横たわる彼の姿は、わたしの恐れるその時の流れと完全に切り離されて存在しているように見える。時に侵されぬ、独立した不変の存在。それに触れることで、わたしは自分の不安を少しでも取り去りたかったのかもしれない。

もっと幼かったころのわたしは、将来に不安を抱いている一九歳のわたしのようには考えておらず、ただ漠然と自分は「大人」になるのだと思い込んでいた。運動場の鉄棒にぶら下がったときのさかさまの世界や、児童館のトランポリンで飛び跳ねたときの浮遊する世界の中に一瞬現れる「将来の自分」の幻影は、いつもこちらに穏やかで懐かしそうな微笑みを投げかけているように見えた。そしてまた、いつかわたしも「大人」になる、と胸をときめかせていたそのころから本が好きだった。当時のわたしは親の都合で転校を繰り返していて、同年代の友達となんとか打ち解けはしても、彼らと自分との間にいつも薄い皮膜が張っているような感覚を抱いていたものだ。が、一方で児童向けの本を開くと、自分はすぐに登場人物の友達になり、彼らと一緒にどこにでも行けどんなことでもできる。自分がどんな「大人」になるか見当もつかなかったが、本好きは変わらないだろうということだけはそのときから分かっていた。

だから今でも、将来が不安ではあれ文学部に入ったことを後悔する気はない。大学で文学の勉強を純粋に楽しんでいる自分が確かにいて、そしてその勉強は、自分で好きに読んでいたときのような作品への没入を伴いながら、別の新たな見方――コンテクストの考慮や多義性への意識、批判的視点――もできるのだということをわたしに教えてくれた。そういう風に読んでみると、本から顔を上げたあとでも物語が続いているように思えるのだ。この世界で生きている人間一人ひとりが文であり、それらが関係しあって物語が作られているのであって、作品の中の登場人物は決して自分たちと無関係ではなく、われわれが集まって紡ぎ出した普遍的な人間の姿なのである。小説に書かれてあることはそのまま時代を超え姿を変え現代の世界でも起こっており、それらをあらゆる側面から眺めてみることは、眼前の世界を誠実に見つめることに他ならないのだ。

このように考えるようになったのは、特に英語で小説を読むようになってからかもしれない。英米文学専修に所属して、生まれて初めて英語が “This is a pen.” のような無味乾燥な文ばかりの言語でないと知った。英文で語られる物語は想像以上に豊饒で、だからこそ読むのが難しい。授業で十ページ読むだけでも何時間もの予習が必要だし、内容を深く考察しようとするともっと時間がかかる。日本語で小説を読むのに慣れ切っていたわたしは、最初そのスピードの遅さに戸惑った。またそもそも英語が得意なわけでもない（英米文学専修に進むと言うと、両親は驚くと同時に強く反対したものだ）。それでもなんとか日々の予習をこなしていくにつれ、わたしはこの拙い読み方が、これまでとはまったく異なる味わいを作品に持たせることに気づいた。日本語ではあまり考えてこなかった文法や単語にまで自然と目が向くようになったのだ。これまではガツガツとかきこんでいたご飯も、少しずつ口に運んでゆっくりと咀嚼すると、感じたことのなかった甘みにハッとさせられるのと同じように。そうして必ず頭（主語）と胴体（述語）があり、背が高かったり低かったりする文章たちを、トップデザイナーのごとく真剣にくまなく眺めていると、例えば三宮センター街の入口に立ったときのような独特の感覚に襲われる――様々な人々が同じ方向に歩き、あるいは別の方向に向き直り、横切り、座り、立ち止まり、しかし入口からだとうごめく一つの塊に見えるときの、あの圧倒。そこにはわたしの知らない、でもなぜか心奪われる音楽が流れている。その調べに誘われ塊の中に自分自身を進ませるとき、他ならぬこのわたしが物語を構成する一要因なのだという風に思え、将来どのようになるか未だ検討はつかないままだけれども、今この渦の中で身を躍らせる自分を、なんだか愛せそうな気がしてくるのだ。

そんなことを考えている間にあっけなくハタチをむかえ、わたしは事実上の「大人」になった。あれほど欲していた酒も自分で買って飲めるようになった。そうして、初夏の金曜日の夜、ベランダで缶ビールをあけるということがどのようなものかを知ることになる。まだ冷ややかな、だがどこか潤んだような風が頬を撫でつけ、目の前には街明かりが星々のように広がっていて、どこかから肉か何かを焼いているような、香ばしい香りが漂ってくる。それらを酔った体でぼんやりと捉えているうちに、ふと海の向こうで、煌々と光る電灯とは異質のとろみのある明かりのもとで、静かに眠るレーニンの横顔が見えた気がした。あっ、と思ったときにはすでに気がついている。わたしはもう、とうの昔に船出をしている。将来のことを考えるとき、いつも浮かぶのは波打ち際で立ちつくす己の姿ばかりで、自分の出発は自分で決めることができるものだと思い込んでいた。その考え自体が傲慢だったのだ。われわれは生まれると同時に自分の舟を後ろから押され、そしてそのあとは、ときに周囲に多くの船乗りがいる海を、ときに見回すと誰もいない海を、嵐の中や晴天の中、若者の自意識過剰な絶望を抱えながら、あるいは老人の過ぎ去ってしまったものへの褪せた愛情や憎悪を感じながら、レーニンの待つ穏やかで底冷えのするモスクワの夜へと漕いで行くのだ。そう考えたとき、ある一節が頭に浮かんだ――

“ So we beat on, boats against the current, borne back ceaselessly into the past. [*1]”

「だからこそ我々は、前へ前へと進み続けるのだ。流れに立ち向かうボートのように、絶え間なく過去へと押し戻されながらも。[*2]」

『グレート・ギャツビー』の最後の文である。初めてこの作品を読んだとき、わたしはこの終わり方が好きになれなかった。この美しい語りによって、ギャツビー自身の醜さや執着心がすべてなかったことにされたような感じがしたからだ。右手の缶ビールをあおると、アルコール特有の苦みが口いっぱいに広がって、思わず顔をしかめる。しかしそれでも、これらの言葉は濡れて張りついたシャツのように頭から離れない。しばらくその不快感と格闘していたが、ふっ、と麦の芳香が鼻を通り抜けたとき、わたしはこの一節を生涯忘れることはないだろうと悟った。われわれは苦しくとも、わけが分からなくとも、過去をよきものとして振り返りながら前に進まざるを得ないのだ。もしそれを忘れそうになったとき、この言葉は灯台のようにわたしを導いてくれるだろう。

そうして今日もわたしは進む。モスクワの夜に、レーニンが血豆だらけの手をやさしく撫でてくれるまで。

引用

*1：eBooks@Adelaide.　The Great Gatsby, by F. Scott Fitzgerald : Chapter 9　https://ebooks.adelaide.edu.au/f/fitzgerald/f_scott/gatsby/chapter9.html
(最終検索日　2017/07/07)

*2：スコット・フィッツギェラルド　村上春樹訳『グレート・ギャツビー』 中央公論社 (2006/11/10)

佳　作

歩く魚と独り言

神谷　茉音（哲学専修３回生）

歩く魚を見たことがある。長い髪と薄青色のひれを揺らし、セピア色の足で踊っていた。舞台は夜のように暗かった。魚はずっとずっと独り言を言っていた。

これは私が現代バレエを習っていた頃の記憶だ。レオタードを着たまま、舞台袖で歩く魚を見ていた。もう十五年も前のことだが、その記憶ははっきりと残っている。それは美しかった。

冬の山は寒い。斑濃に染まった六甲山を、電線が縛りつけている。ぼんやりとそれを眺め坂を登る。ポケットに入れた手は冷えて悴んでいた。一人で歩くとき、私は下を向かない。背筋を伸ばし前を見て、急ぎ足で歩く。その日、私が余所見をしてとろとろ歩いていたのは、馬術部が世話している馬が見えたからだ。

競走馬が好きだ。生命力を張り詰めた熱い肌、その下のしなやかな筋肉と沸騰する血、詩を生むために駆ける四肢、音楽を奏でる絹糸の尾、濡れた瞳。走る姿は芸術と呼ぶに相応しい。彼らが地を駆けるのを見ると、世界の本当のすべてはここにあるのだと思わされる。

そういうわけだから、私は休みになると時折競馬場へ足を運ぶ。馬券を買うでも何をするでもなく、ただレースを眺める。仁川の競馬場は雨でも楽しめる。明るくて良い競馬場だ。しかしやはり冬の寒さは堪え難く、秋が終わると足が遠のいていた。最近は中継を見るばかりになっている。

暖かくなればまたレースを見に行こうと考えながら、寒空の下、いつもの道を歩いて帰る。夙川沿いには桜の枯木が蠢いている。時刻は五時になるかならないかだというのに、陽はもう半分隠れていた。空は青と橙に染まっている。私はマフラーに顔を埋め、川沿いのベンチに腰掛けた。鬱は夜行性で、宵の明星と共に光り始める。そして冬の夜は長い。橋の向こうにぽつねんと輝く一番星が見える。手押し車の女性がゆっくりと通り過ぎた。

今にも凍りつきそうな川を見て、ふと思う。競走馬は独り言を言うだろうか？

歩く魚は独り言を言っていた。それはつまり、独りで歩いていたということだ。彼女は確かに独りだった。闇の中をたった独りで踊っていた。競走馬はどうだろうか。彼らの背には必ず人が乗っている。騎手のいない競走馬は、競走馬ではないのだ。彼らは独りで走れない。きっと独り言も言わないだろう。その代わり、彼らは音を紡ぐことができる。音楽は重なり合い、私達の心を震わす。

そこまで考えて、初めて川の流れる音が耳に入った。ここはこんなにも静かだっただろうか、と思った。とっくに陽は沈み、辺りは夜の準備を終えていた。私は立ち上がり、コートの前をきつく合わせ、急ぎ足で帰る。いつものように、背を伸ばして視線を真っ直ぐ前に向け、歩く。冷たい風が枯木を鳴らした時、はっとして足元を見た。私は本当に独りで歩いているのだろうか？

家に帰ると猫が布団で丸くなっている。悴んだ手で撫でると顔を上げ、また眠りに戻ってしまった。若くはないが美しい猫だ。頭が良いので、私はよくその水晶のような瞳に向かって相談事をする。さっそく彼女に、君は独りで歩けるか？ と訊いてみる。彼女はいつも何も言わない。元々口数が少ないのだ。特に私の質問には答えたことがない。それでも彼女にものを尋ねてしまうのは、やはりその目が何かを教えてくれそうに見えるからだ。無言で瞼を閉じた猫を撫でる。果たして彼女は、私のいない間独り言を言っているだろうか。その様子を想像していると、彼女が大きく一つ欠伸をした。私は思考を中断し、彼女の隣に寝転んだ。鬱は夜行性で、宵の明星と共に光り始める。そして、冬の夜は長い。私は彼女と、冬の終わりを待ち侘びている。

或る寒い日に、水槽に入ったたくさんの金魚を見た。夜のきぃんと鳴りそうな水の中を、金魚は優雅に泳いでいる。けれどそれは、いつか見た歩く魚と全然違って見えた。揺れる尾ひれは彼女と同じ動きをしているが、金魚はおそらく、歩けない。歩く魚の独り言を恋しく思う。

その日、私は夢を見た。どんよりと立ち込める曇り空、霞んだグラウンド、グレースケールの世界。見慣れた白い体操服を身につけて、立ちすくんでいた。中学生の頃、陸上部で毎日着ていた服だ。グラウンドではあの頃と何一つ変わらない同級生たちが、気持ちよさそうに走っている。鮮やかなスカイブルーのハーフパンツだけが、モノクロの世界の中で揺れていた。大好きだったあの子の髪が冬風になびいている。羨ましくて、焦がれて、けれど私は少しも動けなかった。ストップウォッチを持ったあの子が私のところへ来る。

「走りなよ」

私は、もう走れないと言う。あの夏に陸上はやめてしまった。私はあの子のようにはなれなかった。あの子になれないなら、一緒にいられないなら、陸上なんてする意味がなかった。体操服だってハーフパンツだって本当はもうとっくに捨てた。スパイクも、ランニングシューズも、もうない。

それでも彼女は言う。走りなよ、と。

逡巡して、スパイクを履いた右足を前に出す。乾いたグラウンドを蹴る。私は走った。身体は確かに走り方を覚えていた。腿を高く上げ、脇を締めて腕を力強く振る。上体は低く、視線は斜め前の地面を見つめて、脚が後ろへ流れないように、地面からの反発を全身で受け取って、前へ、前へ、前へ。

それなのに少しも進まない。重くて、苦しくて、走れない。

私はやっぱり、ちっともあの子に近づけない。

悔しくて悲しくて泣きそうになった時、私は目を覚ました。

人はなぜ歩くのだろうか。座って休める温かい場所を探して歩くのだろうか。歩いた先に安寧はあるのか。こんな賭けはやめて、今ここで、歩くことをやめて座り込んでしまえば、どうなるだろうか。

魚はなぜ歩くのだろうか。あの日見た歩く魚は、どんな独り言を言っていたのだろうか。

冬は足を引きずるように去っていく。四月に入ってようやく春めいてきた。遅咲きの桜が散るのを待たず、祖父は死んだ。夙川沿いの桜は温い風に揺れている。ふと、祖父はいつから一人で歩けなくなっただろうか、と考えた。

明くる日の帰り道は冷たい雨が降っていた。濡れたローズマリーから、ほんのりと香りが漂う。ふいに、昔もらった手紙のことを思い出した。ずいぶん前に私の作品を読んで、感想をしたためて送ってくれたものだ。その人とはもうずっと連絡を取っていないが、手紙はとても嬉しいものだったので大切にしまってある。手紙というのは、こうやって突然脳裏に現れる。ローズマリーの花言葉は「追憶」だ。早速家に帰ってそれを探し出す。人柄に似た、しなやかで整った字を追う。探していた言葉は変わらずそこにあった。

「貴方はとても正しく流転しています」

祖父の夢を見た。私は電車に乗っていた。車窓から見えるのは、生前祖父が描いていたように鮮やかな油彩の風景画で、隣で祖父はベッド

に寝ている。私は誰へともなく話し続ける。まるで子供のように、見たものと感じたことを、ただ独白し続ける。するといつのまにか祖父は起き上がり、窓の外を見る。私の名前を呼び、何事か呟いた。それがなんと言ったかわからなかった。けれど嬉しくて夢中で話し続け、突如、天邪鬼が右後ろから囁いた。私ははっとして、泣きながら「これは夢だ」と呟き、その瞬間に目が覚めた。

カーテンを開けると、雨は止んでいた。私は、祖父はあの電車を降りただろうか、と考えた。

目を離した隙に、桜は鮮緑に染まる。夙川沿いの初夏は爽やかで柔らかい。透き通った川の流れを見ながら、また、私は歩く。頭の中に、祖父が一人で歩いて電車を降りるビジョンが映し出されている。私はそれをただ見つめている。電車から降りることはできない。ここにいる乗客たちと、この電車に乗ったまま、降りるべき駅を待つ。祖父がなんと言ったかは、わからないままだ。

温かいとろとろした水を眺めていると、冬の日に見た金魚達を思い出す。あれが私だ。決してひとりにはなれない。冷たい水の中に、誰かと閉じ込められて、それでも正しく流転している。

魚は一人で歩き一人で言葉を紡いでいた。夜の舞台でたった独り、歩いていた。水槽の金魚はきっと歩けない。馬は独りで走れない。月のような猫の目を思い出す。彼女はきっと、自分が独りでは歩けないことを知っている。それを受け入れてなお、独りで歩くことを諦めない強さを持っている。

アダムとイヴが楽園を揃って追放された時から、人は、荒野を彷徨い続けている。人は独りで生まれ独りで死んでいく。けれどその道中は決して独りになることは許されない。帰趨の時まで、移り変わりながら止まることなく、流転しなければならない。人は独りで歩けない。

川沿いにはいつのまにかたくさんの人が歩いていた。買い物帰りの人、走る小学生、電話をしている女生徒、犬と並んで歩く老婆。木陰で立ち止まると、急に不思議な愉快に襲われた。ここにいる誰が、私のように歩くことばかり考えて歩いているだろう。

ヒトが直立二足歩行を始めたのは約七百万年前と言われている。人が言葉を操り始めたのは、早くても四百万年前だそうだ。「人生とは、歩き続けることである」などと言えばそれらしいが、そもそも、歩くとはいったいどういうことなのだろうか。たかだか四百万年で作った言葉で、七百万年使われてきた歩行の全てを説明などできるはずもない。ましてや四十億年繰り返されてきた生は、言葉では到底太刀打ちならない。この不完全な言葉が、それ故に私は好きだ。

足を上げ、前を向いて歩き出す。それが生きるということだからだ。歩行と生の間に言葉はいらない。いらないからこそ、考える。歩くとはどういうことだろうか。歩いているときはいつもそればかり考えている。

この先に何があるのだろうか。それを思うと、私は立ち止まって座り込んでしまう。すると誰かが私の腕を取って立たせる。歩かせる。隣を歩いてくれる。私は独りになりたかったはずなのに、それが嬉しくてまた歩き出す。

ひとりでは決して歩けない。それでも、ひとりになるために歩き続ける。祖父の言葉を、猫の返事を、競走馬の音楽を、魚の独り言を探している。この先にあると、信じて歩く。

佳　作

自分に自信を持つこと

上石田　菜穂（国文学専修２回生）

「EX テレビ」という昔のテレビ番組の中で、元漫才師の上岡龍太郎さんがおよそ１時間ものあいだたった１人で話し続けるという企画があり、先日私はその映像を動画サイトで視聴した。内容は主に当時のテレビに対する批評なのだが、その中で「断言する話術」について上岡さんが語った部分が強く印象に残った。上岡さんによると、民主主義社会の現代では、何か物事を決定する前に全員の意見を伺わなければならないという習慣が根付いた結果、「～します」というように断定して意見を述べる人が少なくなったらしい。代わりに、「～してみたいと思います」というように、断定を避けてものを言う人が増えたそうだ。

上岡さんによると、世の中にははっきり割りきれるようなものはめったにないものだ。だが、だからといって自分が正直にも不安げに言ってしまうと、相手も不安にさせるだけなのという。たとえば、男性が女性を誘う場面では「お茶しに行きませんか」と相手に yes/no を判断させるよりも、「お茶しに行きましょう」と言い切った方が成功率は高くなるのだそうだ。これは、女性側からすると最終的な判断を自分ではなく相手に任せたほうが責任が軽くなり、誘いに乗りやすくなるからだという。すなわち、断言することで自ら責任を引き受ける人が、基準を失った現代において人々を惹き付けることができるのだといえる。

耳の痛い話である。私もまた、断定を避けてものを言ってしまう人間の一人だ。行動や価値を判断する基準を自分の中に持っておらず、自分で何がしたいかさえもわかっていないことがある。だから、上岡さんの言うように断定を避け、他人に判断を委ねてしまうことが多くある。これは、自分に自信がないことの表れである。だが、私はそのような自分を変えようと決意した。最近は意識的に「自分に自信を持つこと」を心がけているようにしている。

私が自分を変えようと決意したのには、一人の先輩との出会いがきっかけとなっている。この先輩は上岡龍太郎さんのファンで、私にも上岡さんを勧めてくれた人でもあるのだが、本人もまた適度に自信を持っていて、人を惹き付ける人間であるのだ。自信があるから、判断力や行動力が卓越している。まず、趣味が多い。映画、美術館や合唱、ブラジリアン柔術や太極拳、筋トレなど、多岐に渡る趣味を継続している。さらに、フットワークが軽くて、久しぶりに現況を訪ねてみるたびに拠点が変わっている。オーストラリアから帰り、この前までドイツに住んでいたかと思えば今度は東京にいたりでせわしない。過去には、高校時代の憧れの人が勤めているからといってわざわざ王子公園から京都までバイト通いしたこともあるそうだ。また、友人たちとサイゼリアに行った際に、全員分の注文を勝手にイカスミパスタにしたことは、伝説として周りの人々の間で語られている。

先輩はそのような変わり者だが、様々な場面で私を変えてくれた人でもある。例えば、以前の私は、眼鏡をかけると真面目で野暮ったく見えるし、何より他人の顔を見るのが恐かったから、視力が悪いにも関わらず眼鏡を外して行動していた。そのように説明してもなお、眼鏡をかけろと言ってくれたのは、その先輩だった。また、私は歯並びが悪いのが気になるから、歯を見せて笑うことに抵抗があった。そんな私に

対して、歯並びは悪くない、歯を見せて笑った方が良いと断言してくれたこともある。先輩は他にもたくさん、癖毛や太い脚など私のコンプレックスをすべて「そんなことない」と断言してくれたから、私はあるがままの自分のことを前より少しだけ愛せるようになった。今では、私はいつも眼鏡をかけて歩き、歯を見せて不細工な、しかし心の底の笑顔をさらしている。

私は塾講師のアルバイトをしているのだが、先生として授業をやっている時は特に主張を断言するように気をつけている。講師は勉強の内容を解説するだけでなく、勉強のやり方や進路まで指導することになる。そんな時、自信がなく不安そうに話をすれば、先生のことをよく観察している生徒たちに不安病が伝染してしまう。先生は適度な自信を持っていて、頼りになるような人にならなければ、生徒から信頼されないのである。

私のバイト先の塾は、個別指導形式の授業が特徴的であるためか、勉強するのが苦手で１人では集中できないような生徒たちが集まる。私も勉強、とりわけ数学には苦労をしたから、勉強がわからない子の気持ちはわかる。しかし、勉強をやる気にもならず、与えた宿題さえやってこない子の気持ちには寄り添ってあげることが難しかった。バイトを始めた頃は、問題を解いてくれない生徒に戸惑って、自分の教え方が悪いのではないかと自信を失いかけた日もあった。だが、そこでグッとこらえて、自分への信頼を保ち続けたところ、「自分は教師に不適格な人間なのではないか」という内側に向いた視点から、「生徒はどうしたらやる気を出してくれるのか」という外側への視点に切り替えることができた。そして、その視点に立って試行錯誤した末、なんとか達成感の得られる授業ができた上に、私自身の成長にもなったのである。

一人目の生徒は、吹奏楽の部活に全力投球している一方で、勉強の方がおざなりになっている子だった。授業中も暇を見つけては楽譜を取り出し、勉強に集中できていない様子が見られた。問題を解かせても不正解ばかりで全く理解できていないが、不正解が続くと徐々にやる気を失って解説もあまり聞いてくれなくなってしまう。これでは本人ができる問題をなぞるだけで、90分の授業時間が新たな学びは一つも得られないまま終わってしまう。

そこで私は、焦る気持ちを押さえて落ち着きを取り戻し、この生徒がどうして勉強に集中できないのか、どうしたら集中してくれるかを考えることにした。そして、生徒から普段の学校生活や今日学校で起こったことを訊ねてみたのである。すると、その子は学校内での人間関係に悩みを抱えており、特に嫌なことが起こった日は落ち込んで勉強にも身が入らなくなってしまうことや、大好きな吹奏楽のコンクールが近くて本人にはやる気が満ち溢れているにもかかわらず、周りの人はあまり熱心に練習しようとせず悩んでいることなどを話してくれた。話をしたことで本人は気が楽になったのか、より私に心を開いてくれるようになった。

それから私はもう一押しをして、気分転換になるような簡単なクイズを出した。先ほどの変わり者の先輩から教えてもらった「水とミルクの問題」というクイズだ。出題者が手にコップを持つジェスチャーをしながら「今、コップの中には水かミルクかどちらが入っているでしょう？」と尋ねるのだ。実は、この問題の答えは出題者が任意に決めることができる。答えが水の時には、出題者は手元を見ないで相手の目を見て「どっちだ」と先ほどの質問を唱える。答えがミルクの時には、出題者は手元を見ながら質問すれば良いのだ。これが「水（見ず）とミルク（見るく）の問題」である。この問題の答えをやっと見つけた末にくだらないジョークを聞いた生徒は、大笑いして自分から問題を出してくれた。それが学校の数学の時間に先生から教えてもらったクイズだったようで、思わぬ展開であったが、そこから楽しい雰囲気で数学の勉強にすんなりと入ることができた。回り道をしたが、勉強の楽しさを見いだしてくれたのである。

また、二人目の子は、学習障害の疑われるグレーゾーンの子である。その子の話によると、どうも学校ではいじめられているようで、分からない問題を友達に聞くことは困難であるようだった。また、家庭では我が子が周りの子と違うことには気付いている様子だが、心配ゆえか厳しく怒ることでしつけようとしているようで、生徒の子としばしば反発しているようである。塾での様子はといえば、あるPCゲームに熱中しているようで、授業中もすぐその話を始めて止まらなくなってしまう。授業中は解けた問題も、次に来た時には忘れてしまう。私はてんてこ舞いになりながら困惑していた。塾は個別指導とはいえ、講師は３人の生徒を同時に見ているので、一人にかけられる時間は制限されており、その子一人にじっくりと付き合うのは難しいのである。

てんてこ舞いの授業の後、その生徒を去年１年間もの間みていた先生からアドバイスを受け、次の授業は万全の態勢で挑んだ。アドバイスによると、その子は授業の初めに「初めの15分でここをやって、次の20分では…」というように、時間を区切ってやることを決める方が、見通しが立って授業しやすくなるのだという。私はまだその子の実力がよく分からず、授業を始める前に授業の見通しを立てることが不可能だったので、代わりに小問題を出すときにタイマーで制限時間を設けて問題を解かせてみた。すると、タイマーを開始した瞬間その子がパッと切り替わり、驚くほどの集中力で問題に取り組んでくれた。おそらく、制限時間が与えられたことで、ゲームのような感覚で問題に取り組めたからではないか。さらに、本人いわく前回の授業のことは全く覚えていないとのことだったので、２回目の授業では解説したことを本人のノートに赤ペンで大きく書くようにした。そして、アドバイスによると、その子はとにかく褒めて伸ばした方が良いとのことだったので、授業中は特に意識して褒め、はなまるの代わりに好きだという猫のイラストを描いた。すると、機嫌よく授業を受けてくれたようで、出席ノートには大好きな猫のイラストをお返しに描いてくれた。美術部だけあって、とても上手な絵だった。

このように、先生が自信を持っていれば、生徒は信頼して自分のことを話してくれるようになるし、先生の言うことも良く聞いてくれるようになる。塾には、勉強だけでなく普段の生活に不安を抱えている子が多く、その悩みを共有してあげることもまた大切となるのだ。さらに先生である私自身も、余裕や自信を持つことで視点を切り替えることに成功し、生徒の背景となる普段の生活にまで考慮して授業に工夫を凝らすことができる。私は経験からそう学んだ。

私は最近自信を持って生きることを目標にしているが、そのことで既にたくさんの収穫を得ている。まず、自分を愛せるようになり、前向きに生きられるようになった。また、人から信頼をされるようになったし、視点を変えて新たな発見をすることもできた。これから、上岡さんの言うような周りの人々を惹き付けることができる人に、また先輩のような判断行動力のある人にもなりたい。なるつもりだ。